

第一インターナショナルとバクーニン

一般に第一インターナショナルと呼ばれている運動は、ロンドンに本拠を置き、労働者諸団体と社会主義革命派の人びとの協働による、社会運動だが、そのニュアンスはどちらかと言えば、今日の労働運動の源流とみられるもので、労働者階級の経済的地位向上、労働時間の短縮と工場法の制定、普仏戦争（1870年）パリコミューン（1871年）を経て、労働者の政治参加を反戦運動とコミューン活動を通じて展開したものであった。そこで第一インターナショナルの第一は第二以降のマルクス派共産主義インターナショナルに照応した呼称であって、バクーニンやマルクスの著作の中では第一を冠したものはなく、たゞインターナショナルと呼ばれている。この稿でも以後、それに従うが、インターナショナルそのものがまた略称であって、正式には1864年9月28日、ロンドンのセントマーチンホールで旗揚げした組織、国際労働者協会（Working Men's International Association, I Association internationale des Travailleurs）とそ

の活動を指すものである（なおA.I.T.の会議、活動経過は別掲資料1にまとめた表を参照されたい。）A.I.T.がなぜ英国に創設されたかの理由は、産業革命の進展により、英国が最も先進的で、農業は破壊され、農民が都市に流入して賃金生活者となり、ここにプロレタリアートの興隆を見るに至ったからである。事実1830年代のチャーチスト運動は既に革命的労働者運動の性質や連帯とインターナショナルリズムをもっていた。もともと労働者側のインターナショナルは資本家と地主の協調に対向して、資本主義の条件の下ではいづれの労働者の生活条件も同じだから「労働」を軸として連帯すべきだとしたのである。そしてこの連帯の語義はフランス革命の合言葉、友愛がら派生したもので普遍性を指している。1842年にはバクーニンはプロレタリア階級の出現を次の様に記した。人民衆、その貧しい階級が疑いもなく人類の大部分を占めてゐる。この階級はその権利が既に理論的に認知されている。しかし今日までいまだに出生によって、貧困と

無知の紐帯によってさげすまれ、また実際に奴隷である。この階級こそ真の民衆を構成しているのであって、何処でも脅迫的態度を取るようになり、敵の階層をうかがい始めた。敵（資本家・地主のこと）に比べれば弱い、だが誰によっても認められた権利の実施を要求しだしたのだ。すべての人がある種の予兆を感じていて、器官が中風にかかっていない人なら再生の言葉を吐くに違いない未来の到来を、身ぶるいするような期待で顔色に現わしている。ロシアでさえ、あの終りのない雪で覆われた天国、われらの知るところが少く、大いなる未来が待っているあの国でも黒雲が集り、嵐の前駆をしている。空気は重くうっとうしくて、稲光りが走るV

ドイツにおける反動

これがロシアを含むヨーロッパの社会状況の一面であったが、1834-1839年のパリではドイツ手工業組合と正義の連合という二団体が設置され、これが1847年-1851年の活動を通してコミンニスト同盟に改組された。マルクス、エンゲルスが共産党宣言（1848年）を発表したのはこの組織を通してだった。またコミンニスト同盟はフランスでブランキストの蜂起が相つぎ、当局の弾圧が厳しくなると本拠をロンドンに移した（1839年）。この同盟の活動は社会主義の基本理

念の宣伝を主な仕事としていて、マルクスがそれまで精力的にブラッセル、ベルギー、ドイツ、ポーランドに設置してきた民主同盟各支部はすべてこのコミンニスト同盟に組込まれ、1850年には各地で起きた革命運動の経験から、共産社会の実現までを永久革命Vと規定した。そして漸次労働者サークルの基礎となり、メンバーもドイツ人、スイス人、英国人、スカンジナビア諸国の人びと、オランダ、ハンガリー、チエコ、南スラブ、ロシア人等の参加があった。特に英国人メンバーは労働組合の指導者やチャーチスト運動者、オウエン派の人であったと言われている。その中から委員会が生れ、インターナショナルが創設され、（1864年）総評議会（General Council）が事務を掌握し、費用としてるポンド集った。またプログラムについては、イタリア労働者協会（マッツイーニの組織）の規約を写したもののやチャーチスト運動家の手によるもの、フランス人ル・ルベットの起案があったが、マルクスはいづれも労働者階級運動の実情に合わないとして斥け、自身の起草したA呼びかけと仮規則Vを提出した。（仮規則については資料2参照のこと）A呼びかけVは1848年から1864年までの労働界の移り変りを、主として英国を例にとりて分析し、生産量は増大し、税収入は1853年から186

1年の間に20倍に増加していながら、労働者階級の経済的地位は低く未だに飢えている。A産業大衆の不幸は現状の悪しき基礎—労働生産力の新開発が社会的反目と対立を深めているからであるVそこでA英国の労働者と大陸の労働者の連帯を要請しV10時間就業法の提出、協定の規模拡大、労働者の政治参加Aそれ故（地主と資本家は常に独占擁護に政治権力を利用すること）政治権力の奪取が労働者階級の義務であるVを目標として明示した。しかし訴えているのはあくまで労働者の連帯であって、再びA万国のプロレタリアよ、団結せよVと檄を出している。A仮規則Vは考慮することとしてA労働者階級の解放は労働者階級自身の手によって奪取しなければならぬVとし、団体名称をA国際労働者協会Vとして総評議会をロンドンに設置すること、年次例会を一年に一回開き、総評議会の役割は情報と労働者の実態統計の収集伝達（第6項）であり参加諸団体の活動は同時的均一なものとし、適切と認めたら総評議会がイニシヤチブを執るとした。これが後に紛争の種になる組織の問題点であるが、政治参加については仮規則のパラグラフにA即ち労働者階級の経済的解放は、それ故偉大な目標でありこれに對しすべての政治運動は、一手段として従属しなければならないVが紛争の第2点であった。し

かし私としては第7項も組織論として問題になると思う、そこでは総評議会が各国の群小団体と個々に接しようとするのは事務がはん雑だからA国際協会の会員は自国の関連性のない労働者諸団体を一国毎にまとめ、中央国民機関によって代表させるよう最大の努力を払うべきであるV更に各国の特殊性を認めた上でA法的障礙のない限り、独立した地方団体が直接ロンドン総評議会に連絡することは認めないVとしている。これはステクロフ（第一インターナショナルの歴史の著者）などはA民主的中央集権制Vと言うが、バクーニン派との根本的な違いもそこにあるのであって、本稿では組織論と労働者の政治参加をめぐっての対立点をバクーニンとマルクスの気質の相違とだけに片づけず、イデオロギー闘争とみて素描してみよう。

☆インターナショナルに就てのマルクスの意見

AITの創設者の一人であり、総評議会の頭脳であったマルクスは総評議会での肩書はドイツ通信書記、後にロシア支部通信書記であった。1871年12月23日付F.ボルト宛手紙はインターナショナルの経過を最初からみてきた人が自己の意図と現実の成果との裂け目を覗いた場合のものとして興味深い。

「インターナショナルは戦闘的勢力として、社会主義

者、半社会主義者、諸セクトに代えて労働者階級の現実的な組織をもつて当てる意味で創設した。仮規則や呼びかけを見ればこの事は一目瞭然だ。他方インターナショナルは、歴史の歩みが諸セクト主義を打破しない限り維持できなかった。社会主義者の諸セクト主義の発展と素晴らしい労働者階級運動の発展とは、常に反比例していた。だから諸セクトについて（歴史的）正当性が存在する限り、独立した歴史的運動に対する労働者階級は未成熟であった。：それ故インターナショナルの歴史は、総評議会が各セクト及びインターナショナル内部で、素晴らしい労働者階級運動に反対することで自己を維持しようとする人びとに対する絶えざる闘争であった。」（第一インターナショナル／ステクロフ著 pp75-76）

この文脈を読み流すとマルクスは社会主義者の諸セクトと闘い、素晴らしい労働者階級の歴史的作用を実現させたと言うことになる。所で彼が反歴史的な、または歴史に取残される運命にあると見た諸セクトとはフランスでのブルードン主義者、ブランキスト、ドイツのラサール主義者、初期のペーベル、リープクネヒトのブルジョワ的民主主義、または社会民主党員、ベルギーのド・パエブを代表とするコレクティビスト（集産主義者）それにバクーニン派であった。そこで概説書によればマルク

スはインターナショナル内部で初めにブルードン主義者と闘ってこれを破り、更にバクーニン派と闘って、ハーグ大会でこれに痛撃を与えたと言われるのである。しかし考えなおしてみると、一体総評議会は誰の為にあるのか、マルクスの偉大な思考力と該博な知識が労働者階級に裨益したのは認めるとして、総評議会内部をマルクスを中心とするその信奉者が漸次固めていき、指導権を発揮するに至ったのは、マルクスの戦略戦術の巧妙な勝利であったとは言え、それ自体がセクト的行為ではなかったかどうか、マルクスのセクトが勝利するのは歴史の必然で、ブルードン派やブランキスト、バクーニン派が勝利するのはあり得ないかどうかとして決めつけられるのか、真実は違った様相を告げている。

バクーニンは指摘した。「その創設の時から、マルクスは本當の指導者でありつづけた。彼の周囲にはドイツ人の小グループがあり、彼の弟子であると同時に総評議会のメンバーだった」「マルクスは総評議会を政治機構（government）に作り変えた。」（ロマーヌのインターナショナルへの手紙、1872年1月23日発信）

☆インターナショナルに就てのバクーニンの意見
バクーニンがインターナショナルへ参加したのはマル

クスを介して1868年6月A I T ジュネーブ支部に配置されたのだ。それ迄のバクーニンを何をしていたかは、ハバクーニンの伝言V中のマルクスに就いての項に出ている。東奔西走し確たる未来の建設の展望もなくたゞ既存のものを破壊することに熱中していたのだ。むしろドレスデンの蜂起(1849年)から逮捕(1850年)ロシア送還とペテルスベルグでの幽閉(1858年)シベリア徒刑更に日本を通じて米国からロンドンへの脱出(1861年)スエーデンやコペンハーゲン、蜂起に参加し挫折を繰返して1864年以降はイタリア、スイスに渡り、1867年にはハ平和と自由の同盟Vに参加していた。だからマルクスからみれば英国とドイツでは定着したインターナショナルをスイスとイタリアに創設するには、丁度ラファルグをスペインに派遣したようにバクーニンに委せるのが適当と判断したのであろう。1868年12月バクーニンはマルクス宛に次の手紙を出している。

「私の活動場所は貴方が創設者の一人であるインターナショナルです。ご存知のように私は貴方の弟子で、それを誇りにしています。ここに私の関係や個人的な気持ちをすべて申しあげておきます。」

彼はマルクスより4才年長者だった。この文面は働き

場所を得た事に感謝しているのだらうか、マルクスは同年12月28日付エンゲルス宛の手紙で冷やかにつき離している。

「私はロシア人は誰一人として信用していない。私の古い友人がどうなるかと私の知ったことじゃない。バクーニンはセンチメンタルな入会申込書を作っているだけだ。」

マルクスのロシア人嫌いはバクーニンのゲルマン嫌いと同一程度だった。またバクーニンもヘルツェン宛ての手紙1869年10月28日付で語っている。

「マルクスの私に対する悪罵と中傷は忘れない、だがマルクスはインターナショナルに於て有用な人物である。彼の影響力は有益だ。しかしわれわれの間では死の闘争 *une lutte à mort* があるだろう。」

ここで彼が悪罵と中傷としているのはハマルクスとの個人的関係Vに詳しい新ライン新聞の流した記事ハバクーニンはロシア政府の手先か何かそうした者だVというのを始め、彼が幽閉生活を送っている間に、ヨーロッパのマルクス派機関誌に書きたてられた各種の中傷を指している。

しかし公平に見て、バクーニンはこの時から6年間、インターナショナルの各支部をイタリア、スペイン、ス

イス(ロマーノ地方、フランス語を話す地域)に創設しベルギー、フランスの支部との連絡を計り緊密にした功績は認められてよい。たゞマルクスからみると、バクーニンは1868年12月にハ民主社会主義者同盟Vを創設したのはインターナショナル内部に分派を作ったかと思えなかった。1871年11月23日ポルト宛マルクスの手紙は「ロシア人バクーニンはインターナショナルへ、その中心に第2のインターナショナルを作る目的で入ってきた。彼が長でその団体の名は民主社会主義者同盟と言う。」また「バクーニンは総評議会をロンドンからジュネーブへ移すと言う」これは指導権を自己の手中に納めようとする企図だと疑ったのである。これに対するバクーニンの反論は「これは奇妙な嘘である。インターナショナルの将来にとって良くないから、私こそ最初に反対して戦う者だ。」と言う。1869年10月。かようなやりとりを仔細に記しても仕方がない、記憶のよい人なら、バクーニンの「告白」を想起すれば彼の人柄が判る筈だ。ハ過去においても現在と同じく、私には野心が少く、むしろ絶対の真理であると私の信じる諸原則に奉じる人が、能力と手段と不退転の意志をもっているなら、誰にだって私は従うのです。私はその人を長として喜んで仕え、熱意をこめて服します。というのは私は信念や

確信に基づいた規律が好きですし、また尊敬するからです。」

私は彼の性質からしてマルクスを長と見立て、インターナショナルで働くのは真実であつたと思う、では分派活動とみられた同盟はどんな意味があるのか、それは彼の秘密結社作りの好きな傾向によるもので、別な意味があると指摘して置こう。けれど先づバクーニンがマルクスの意図を充分汲み取っていた証拠として、1869年8月7日付イゴリテイ誌に載ったインターナショナルに就いての見解を訳出する。

「われわれは国際労働者協会の創設者達がすべての政治的宗教的問題を、そのプログラムから外見だけにしろ除去したのを賢明だつたと考える。むしろ彼等自身は政治的意見や明瞭な反宗教的意見をもっていない訳ではなかった。けれどもインターナショナルのプログラムにそうした見解を盛込むのを差控えたのだ。何故なら主要な目的は、共同行動に宛てて文明世界の労働大衆が団結することだったからである。共通の基盤を求めなければならなかった。一連の明白な原則というのは、すべての労働者が政治的宗教的信条の差異にかかわらず、また彼等が立派な労働者でありながら酷く搾取され苦しめられているのだから、同意できるものでなければならなかった」

バクーニンはもしインターナショナルが政治的宗教的規範を打出していたら、労働大衆は司祭や主権者、ブルジョワの政治政党の宣伝に乗せられてきているから忽ち虚偽に惑わされ、彼等自身の利益になることを省りみなくたつたろうと指摘する。「更に、各国の労働大衆の間には産業、政治、知性、道德の発展度合に差がある。それを現在、一個の同質的政治的、反宗教的理念で統一するのは不可能だ。もしわれわれがインターナショナルのプログラムにさような政治的反宗教的理念を盛込むなら、またもしそのプログラムを受入れるのが会員資格の絶対条件とするなら、われわれは一つのセクトを組織するのであって、決して普遍的協会を作ることにならない。インターナショナルを殺すに違いないのだ。」

彼のこの冷静な分析は、インターナショナルの1864年〜72年に亘る経過の中でマルクスとマルクス派によって裏切られたことになる。

☆コレクティヴィズム（集産主義）と相続権の廃止
インターナショナルの65年66年67年の年次大会は特に波瀾はなかった。ということは労働者階級の運動として、ヨーロッパ各地で認められ、多くの労働団体の参加を受け入れ組織として安定したということであろう。政治的

として出席、後にはオランダ支部代表を兼ねた。思想傾向はブルードン派に同情的で、バクーニン派とも接触があった。マルクスも自派への勧誘の手紙を出しているがインターナショナルの立場からバクーニンとマルクスのイデオロギー闘争には好感をもたなかった。パープは土地の集産的所有権と相続権の（大巾な）廃止をローザンヌ会議で提起したが賛成したのはドイツ、英国、フランスの代表達で、フランスとイタリア代表は私有財産を支持し、反対した。彼は言う。

「私はトランやシェマルと同じく相互主義者（ブルードン派）である。しかし土地の集産所有が相互主義のプログラムに反するとは考えない。このプログラムは労働の全所産は労働者に帰するというのだ。そして厳密に労働量と見合うだけの生産と交換が可能だとするのだ。しかし土地は何ら労働の所産ではないし、交換の相互性はそれに適用できない。生産労働と同じ立脚点に立つなら、地主の権利は土地の生産物所有に限るべきである。

：土地を少数者の財産とすることは、社会の成員をその少数者の従属者にすることになる。地主達が相談して合意すれば、他の人びとを飢えさせ隷属することだって出来るのだ」（第一インターナショナルP128）

マルクスはこの問題についてクーゲルマン宛の手紙、

な発言もロシア専政政府のヨーロッパにおける悪影響を排除するとか、ポーランドの回復に同情を示すとか、米国内でリンカーン大統領が再選されると祝辞を送り、暗殺の際には悲しみのメッセージを送附するとかが主な仕事であった。もちろん、労働者階級の労働争議としてストライキ権の確立なども66年〜68年にかけて英国や大陸でロックアウトのひん発に対応して主題になった。インターナショナルはストに介入する意図として、①外国人のストライキ破りを防止する（例、ロンドンでふるい製造業、洋服仕立業、バスケット製造業での争議で実施された。）②罷業者にカンパを集め送付する…を実行して労働者階級のために闘う姿勢が好感をもって受入れられた。しかしコミンニズムのプログラムが議題に上ったのはブラッセル会議（1868年）からである。それもコレクティヴィズムの観点からであって前年のローザンヌ会議（1867年）あたりで始まりブラッセル会議で明らかになった。所でコレクティヴィズムの理論家はベルギーのド・パープ（César de Paepe 1842年〜1890年）である。彼はベルギー社会主義者、医者だったが大衆に接するには印刷が大事だとして植字工になったと言う。自由思想家でA.I.T.のロンドン会議（1865年、1871年）にはインターナショナルベルギー支部代表

1868年4月6日付で「私はずっと以前に決意した。社会革命はその基礎から土地財産から真剣に初めなければならぬ」と述べるにとどまった。

バクーニンの考えは「国際社会主義者同盟プログラム」2項B、相続権については3項（参照資料3）に表明されている。彼は土地と生産手段はそれぞれのコレクティヴ、コミューン、労働組合、農民団体が収用し、共有財産とした上で、そこに働く労働者の労働に応じて再分配すべきだとした。歴史的にみればフランス革命時のパブリックの平等のための同盟Vのプログラムに源泉が求められるが、あれは分配者が「同盟V」という特殊集団の手によるし、マルクス派ではプロレタリアート独裁という過渡期における「政府V」による国家管理の点で差異がある。

土地のコレクティヴに就ての決議では55名の代表中、賛成30、反対5、棄権15で、ブルードン派は農地のコレクティヴ化に反対だった。

バクーニンがインターナショナルの会議に出席したのは、バザル会議（1869年）である。議題としてドイツ代表リープクネヒトの提案した国民投票権への労働者の参加には「ブルジョワ国家の改革を強化する目的しかない政治運動には参加すべきでない」として反対した。

また土地の共有制についてはコレクティヴィズムを支持し、相続権廃止に就いて演説した。

要旨

「歴史を通して法律または政治的権利と呼ばれてきたものは、潜在する事実を表現したものとまたその所産でしかないのには同意する。だから法律は次に引続き生起する事実の原因になるのである。この意味で法律は、極く現実的非常に有力な現象であり、また法律は新社会組織を樹立しようとする人びとによって廃棄されなければならぬのである。そこで相続権だが、これは最初自然で社会的な富の強制的私有の所産であったが、政治的国家の基礎となり、合法的に家族を設定した。そして個人的所有を保証し、聖化したのである。相続権はまさにその理由によって廃止しなければならない。小規模の農民から強制収用するのは強力な反対を呼びますだろう。小地主達も反動に味方するだろう。それ故今暫くは彼等の所有に委せて置くがよからう。しかし遺産の権利を廃止しなかったらどうなるか？ 農民は自己の所有を私有財産として子供達に贈るだろうし、それを国家が是認するのだ。しかしもし現在の社会組織が無化されたら、国家の政治的・法律的無化も同時に達成されるのだ。もし相続権が廃止されるなら、農民に何が残るだろうか？ 所有

権の事実しかないのだ。それは国家の法的承認と強力な保護を受けないのだから、時流と革命勢力によって容易に修正されよう。」

相続権廃止についての決議採択投票では、賛成32、中立23、欠席13で、形式採択は行われなかったが、総評議会の提案に対する明白な反対を表明した。ステクロフは記している。「マルクスとバクーニンの最初の公開闘争は後者（バク）の勝利に終わった。そこで総評議会はインターナショナルの内部に危険物を蔵するのはどんなに重大かを理解するに至った。ライバル同志の苛酷なき闘いが始まったのだ。その闘争がインターナショナルを分裂させた。」（第一インターナショナルP144）

☆マルクスの極秘文書

1870年のバクーニンは9月にフランスで共和国宣言がでて、忙しかった。リヨンの蜂起に参加した詳細は資料1で見て貰いたい。マルクスはジュネーブにインターナショナルロシア支部を設置し、ロシア人亡命者ウチンを長として、ロシア関係におけるバクーニンの資料を収集させた。またマルクス自身もこのグループから総評議会でのロシア支部代表に任命された。△私が若いロシアの代表だなんて、奇妙な地位に置かれたものだ△とエ

ンゲルスに書き送った。（1870年3月24日付）この支部の重要な目的の一つはロシアにおけるバクーニンのアナキストプロバガンダーに對抗することだったとステクロフは書いている。

マルクスは3月28日付で有名な極秘文書（Communication Confidentialle）—独文—を書き、それをロンドン総評議会の名でドイツ社会民主党幹部宛に送った。

内容は例の中傷記事である。摘記すると(1)バクーニンと逢ったのは1843年（実際は1844年）でインターナショナルの呼びかけは熱烈に支持すると言ってきた。

(2)バクーニンはスイスへ行きそこで△自由と平和の同盟△を作った。(3)ある筋によるとロシアの手先との疑惑がある。(4)バクーニンには西欧ブルジョワ文明に対しモスクワ人の楽観主義がある。(5)ローザンヌ会議では△階級の平等△を唱え、△相続権の廃止△が社会革命の始めだと言った。(6)彼は無思想で喋舌り、秘密結社員で変り者だ。(7)彼はインターナショナルを自分の機関に利用している。(8)ロンドンの総評議会の背後に隠れていゝゆる人民

主的社会主義者同盟△を創設した。プログラムはローザンヌ会議で彼の述べたものと変りがない。(9)あの団体はバクーニンの秘密情報宣伝母体で、彼は社会理論分野に無知な男で、分派の頭目である。(10)あの同盟をイン

ターナショナルとは認めない。同盟の規約はインターナショナルと関係があるように見えるが無だ。（しかし事實は1869年3月9日総評議会は民主的社会主义者国際同盟のAIT加入を認める通知文を出している。それによると「貴同盟の傾向はAITのそれに背馳しない。

△階級の平等△とは資本と労働の調和を廃することだろう。AITは階級の廃止を求め、階級の平等は実現について論理の矛盾だが、ペンが滑ったに違いない」この文はマルクスから見ると隠やかだが、先の同盟はその時点で解散したとされている。(11)バクーニンがインターナショナルを踏み越えるのではなく、インターナショナルがバクーニンを越えるのだ。(12)バーゼル会議で総評議会をジュネーブへ移すと言うが、それではバクーニンの手中に帰してしまふ。(13)彼は相続権の廃止を唱えながら、ヘルツェンの死後毎年25,000フランを汎スラブ党資金として受取っている。（事実バクメチェフ資金と呼ばれるものの授受に関する誤解で、これはS・ネチャエフがヘルツェンの雑誌「鐘」の継続発行費とロシア革命運動費として使ったものである。）

また同年4月19日付ロンドン発信でマルクスは女婿のポールラファルグへ英文の手紙を送っている。要旨(1)バ

クーニンは1868年9月ローザンヌ会議でA.I.T.会員になり1年6ヶ月働いた。(事實は1868年6月ベルンで会員になり以後6年インターの為に尽力している)(2)相続権の廃止は全農民と中産階級を反動へ馳り立てるだけだ。ヤンキーは武器でもって奴隷廃止は出来なかつた。バクーニンは超理想主義に過ぎない。(2)A階級の平等Vは一方に階級を継続し、他方でそれぞれの階級に属する人間の平等を説くなどとは彼の無知と皮相さを示すものだ。(3)労働者階級は政治にかかわってはいけないう。労働組合を作るだけだそう。いつか或る日、インターナショナルが現存のすべての諸国家にとって代るそう。これは私の教義のカルカチャアじゃないか。現存の諸国家がA諸協会Vに変容するのが究極の目標ではあるが、われわれは統治形態を認めなければならぬ。(We must allow the government) 支配階級からなるあれらの大きな労働組合が好きないようにやれるよう認めなければならぬ。なぜならわれわれがそれら(大労働者のこと)を占めるのだから当然容認しなければならぬのだ。それは古い社会主義者の口ぐせに似ていない。賃金労働の廃止をするなら、賃金にかかわるべきではない。賃金率につき資本家と闘争するのは、賃金労働を認めたことになる。この種の馬鹿者はすべて階級運動

は、階級運動として必然的にまた常に政治運動なのが判らないのだ。(4)これは全くマホメット・バクーニンの、コーランを持たないマホメットの理論的荷物である。(5)教会のねずみのように貧乏なあの男は、自分の仕事で生涯一銭も稼いだことがない。(中傷悪罵もここまで来れば極まりと言えよう。エンゲルスの資金援助で生活したのはマルクスであつたのだが;) 幸いバクーニンは生前この文書の内容は知らなかった。その存在は1870年9月9日ペーベルとリーブクネヒトがドイツにおける普仏戦争反対運動を推進して反逆罪に問われた裁判の過程で知ったがいつもの中傷文書としか友人同志に告げていない。

☆普仏戦争とパリコミューン

インターナショナルの1870年度会議は9月5日より開催が前年の大会で予定されていた。だが当局の弾圧が厳しくドイツのメインツに変更になった。ステクロフ説ではこの年に始まった普仏戦争で独・仏の代表が出席できないインターナショナルだとバクーニン派が優勢になる懸念があつて会期を延期したとある。(第一インターナショナルP.409脚註) 戦争は予期されていて、既に68年のブラッセル会議でド・パーブは徴兵忌否とゼネスト

で闘うことを提案していたが、戦端を開くと、フランス代表はドイツ労働者へ向け反戦アピールを出し、国内ではフランス第2帝国の転覆を計った。ドイツの労働界もペーベル、リーブクネヒトの指導で反戦に参加し、その為両人が逮捕され反逆罪に問われた。インターナショナルは7月23日総評議会が宣言を出した。

「…現在公的フランスと公的ドイツが兄弟殺しの戦争を始めた。ドイツ、フランスの労働者は平和で友好的メッセージを交換した。これは歴史に前例のない偉大な事実で未来に明るい希望がもてるものである。またそれは不幸と愚かさをもった旧社会が現在の経済条件によって矛盾を起し国際的に平和をもたらす新社会ができることである。なぜならすべての諸国に共通の基礎として労働があるからだ。」

スイス、スペイン、ベルギーはこの宣言を支持した。普仏戦争結果に対するマルクスの見解はAアルサス、ロレン地方のドイツ併合は、フランスをツアリズムロシアと手を結ばせ、再びドイツに対し、ロシア、フランスの戦争が用意されよう。それは局地戦争でなく、民族戦争の様相を帯びよう。インターナショナルはこれに抵抗するよう万国の労働者に呼びかけるVというのだった。バクーニンの見解ではAプロシアの勝利は社会革命を

少くとも50年は遅らせることになる。フランスは直ちにプロシア侵入軍を追い払い、社会革命のノロシをあげるべきだVというのだった。その実践として9月19日リヨンに赴き、Aフランス救国中央委員会Vを創設して蜂起したが、委員はブルジョワ民主主義者、ブランキスト、バクーニン派(少数)のためであつて、国民軍の迎撃に遭い破られ、リヨンを経てスイスへ遁れた。

注意すべきは普仏戦争の成果がマルクスに及ぼした心理的影響である。バクーニンが1872年になってロマヌのインターナショナル宛手紙で明示したのは70年9月11日付ライプツヒヒ発行Aフオクスタート(国民国家)V誌にマルクスが寄稿した一文がある。

「…今度の戦争は大陸の労働運動の引力の中心をフランスからドイツへ移した。」と述べたのだ。この消息はマルクスからエンゲルス宛手紙70年7月20日付で「フランス人は役立たずのやくざ馬になるようだ。もしプロシアが勝利すれば、国家権力の集中化はドイツの労働者の集権化に有益だろう。ドイツの優勢は、外面的に、ヨーロッパの労働運動の引力の中心をフランスからドイツへ移すことになろう。1866年から現在までの両国の運動を比較してみると、ドイツの労働者階級がフランスのそれより理論と組織について優越しているのが判る。世

界の配置図においてドイツのプロレタリアートがフランスのプロレタリアートより優勢であることは、同時にわれわれの理論がブルードンの理論に勝ったことなのだ」心ある人はこれでマルクスはボナパティズム（帝政復興論者）になったとした。

パリコミューンはインターナショナルとは別の物語である。コミューンに参加したインターナショナルリストは少数で（92名中17名）、ブランキストが多かったとの事だが、有力なフランス代表が市街戦で殺されている。たゞパリコミューンの教訓としてヴァイランのようなブランキスト、ラファルグのようなマルキスト、シャルル・ロングのようなブルードン主義者が、労働者の政治参加に積極的となり、コミューンで敗北したのは先導的労働者党がなかったからで、日常性において党の必要性を主張するようになったことである。71年のロンドン会議ではそれが最大の争点になった。

☆労働者階級の政治参加をめぐる

ポールロビンはフランス人でジュネーブでバクーニン派の機関誌イゴリチの編集をしていた。この雑誌は総評議会の中央集権的傾向を批判したためマルクスの怒りを買ひ、彼はインターナショナルを追われることになっ

た。バクーニンの死後はアナキズム陣営を去り、フランスで近代学校（フランドスコフェーラ）が推進した画期的な教育法で今日でも英国のサマヒルで試みられ、最近ではわが国でヤマガシ会の幸福学園が試みようとしているようだ）の基礎を築いたのは、エマ・ゴールドマン著の同名のエッセイで明らかだが、晩年は新マルサス主義という道徳的な思想運動に参加した。彼は私が総評議会を追放された問題についての弁明という一文の中で、1871年のロンドン会議で紛糾したインターナショナルの仮規則中の労働者階級の政治参加についてのやりとりを証言している。

「インターナショナルには2つの意見があったのを思い出す。一方の人びとは労働者の政治権力奪取を求め、徐々にはあるがやむを得なく現実の議会に入りこむというのだ。他方はこの手段を嫌い、ブルジョワ国家の外側に（en dehors）プロレタリアート政治組織を希望し対抗することであつた。前者は政治にたずさわらぬ等の人びとに策略を用いた。後者は政治にたずさわらないVということにした。（通常この方をマルキストは政治忌避者 abstentioniste 投票棄権者の意Vと呼び軽侮した）訳註」

：会議ではこの単純な話を技巧や多くのやり方で錯雑さ

せた。次のような方法も例の一つだ。規約の前文第3項で英文中の3語 *as a means* を仏文の翻訳で落したのだ。（仮規則は英文を正本として仏、独、イタリア、スペイン語の翻訳を各インターナショナル支部で作成していた訳註）これは政治をするのを望まないインターナショナル内の人達のやったことである。そしてこの文に *comme moyen*（手段として）を付け加えたのだから、そういう人びとはインターナショナルから追放すべきだとした。

ところでこの語は1870年3月頃パリで刊行された第2版に初めて加えられたのだ。私は規約の再版に就

て再読する責任を課された。それで詳しく調べるまでもなく、マルクスの女婿ラファルグの単純な意見によって、英文テキストにつきこの修正とその他が行われたのを知った。（マルクス派が問題にしたフランス文の不備は有力な身内の人の手に成るものだったという訳（筆者記）：この修正に気づくのは私がそれを指摘した人びとだけであることを私は証明した。しかも労働者達はこの長い規約を長時間かけて読まなければ発見できないのだ。だからこの文節の2語の紹介なぞ大したことではないと主張した。」

次に英文と仏文の問題箇所を掲げる。

That the economical emancipation of the working classes is therefore the great end to which every political movement ought to be subordinate as a mean.

Que, pour cette raison, l'émancipation économique des classes ouvrières est le grand but auquel tout mouvement politique doit être subordonné comme un simple moyen.

この問題につきマルクスとエンゲルスの見解は1864年の規約（仮規則）は労働者階級の政治活動と権力の奪取を義務的に包含すると主張した。会議での実際のやりとりを列記すると、

ヴァイアン（ブランキスト）説（労働者階級の）政治回避を宣伝する人々は、正当な規約をごまかしているのだ。政治をいつまでも回避するのは新社会を構成する第一の武器が権力であるのを自覚していないか、または自覚しながら伴っているのだ。V

エンゲルス説（政治に携わるよう労働者に計るべきだ。回避するのは協会の規約に反する。V

ローレンツ（スペイン代表）説（この問題はこの会議で論ずべきでない。なぜならその資格がないからだ。この問題は評議員会で処理すべきで、委任を取付けた上で代表の投票にかけるべきだ。Vベルギー代表はこの意見に賛成。

ウチン（ジュネーブインターナショナルロシア支部代表）説（ローレンツは間違っている。ヴァイアンの提議した問題は規約に含まれるものを露わにしただけであるV更に補足として6年間守って来た規約に翻訳の不備があったとするのは協会の馬鹿にするものである。それで紛糾するのは国際労働者協会の発展にとって有害だV

的に改良して行くのは反対だった。それはマルクスの「過渡的政府」の樹立が例えヘーゲル風の弁証法的過程で国家の廃絶を達成し、階級を消滅させると約束しても、実に国家を容認するが故に、ブルジョワ国家の支配する者と支配される者の関係を新しく組換えて、社会ではなく人民国家Vを設定する故に反対であり絶対に認めなかったのである。

なおこのロンドン会議（1871年9月）ではインターナショナルジュネーブロシア支部代表ウチンが反バクニンの立場から、ネチャーエフ事件の審議を提案したが、これはベルギー支部代表ド・パエブが真偽の程の不確実な件でバクニンを非難するのは行き過ぎだと抗議して取やめになった。また総評議会の権限強化の一環としてマルクスの考えではインターナショナルを各連合の集体化及び管理局（bureau administratif）と成し政党の中心として実行委員会に成ることだと言われている。

☆バクニンの反撃（ソングヴィユ会議）

バクニンはロンドン会議に出席していなかったが、ギヨムやバステリカ等友人同志と連絡があり、直ちに内容を知ると各国の同志宛手紙で知らせた。1871年11

との意見がでた。しかしマルクスは政治回避に有利な宣伝をする人びとは、ジュネーブ会議で投票にかけた規約の欠如した引用部に準拠している。問題は規約によって決定されているのだから協会はいつでも労働者が政治にかかわることを求めているのだVと提言した。バクニンの心証ではマルクスは総評議会を動かしてブランキストを味方に引きこみ、適当にこれを働かしてその後は丁寧に出口までブランキストを案内し、追出したと言っているのだが、彼の分析は正確だった。結局政治参加についての採決では賛成14、反対4だった。1871年10月2日付スコッチマン誌でマルクスは教書を与えている。政治活動は政治権力への道を開いた。政治権力は資本家と地主の累積的権力である。民衆はこの権力に対し闘争しなければならぬ。そしてそれは民衆自身が政治権力を獲得することによってのみ行われる。この演説で問題は解決した。インターナショナルは、今後、政治に介入すべきである。V

バクニンは1871年10月の時点でインターナショナルは一般的態度として政治を排除するものではない。ブルジョワ階級との闘争ではそれに巻き込まれるのは当然である。Vとした。しかし労働者階級が政治政党を結成して、ドイツ社会民主党のように議会に進出し、漸進

月12日ジュラのインターナショナル、ノシャテールとベルンの会員、ジュネーブの革命的社会主义者ソングヴィユに集会し、決議して総評議会と政治参加に反対した。

(1)労働者階級の権力奪取は（インターナショナルの）組織を改変して、総評議会が牛耳る階級制度のものになる。

(2)インターナショナルは今日迄そうであったように各支部の自治を原理とすべきだ。

(3)総評議会はその主たる役割としての通信と統計を仕事とすべきである。

(4)中央集権化と独裁によって、統合を希望するならば、それは自治的グループの自由な連合によって実現することをおわれれば希望する。

(5)未来社会はインターナショナルが設定する組織の一般化に外ならないのだ。

引続きベルギー支部はブラクセル会議を開き、インターナショナルの規約全文は各連合の権利を制限しない。総評議会は通信と報告のセンターでしかない。規約の改訂を要求すると決議した。

更にスペインとイタリアの各支部も同様の決議をして、総評議会に対立した。特にイタリア支部は次のハーグ

会議に代表を送らなかった。スペインでは1868年169年にインターナショナルの支部が設置されたが、これはイタリア人でバクーニンの友人ファネリの活動に負っている。彼はバクーニンの同盟の創設者の一人でもあったからスペインでインターナショナルと言えば同盟のことだった。第1のグループはマドリッドに出来(1868年)第2のグループはバルセロナにあった(1869年)マルクスの女婿ラファエルがスペインを訪れたのは1871年でスペインインターナショナル連合と接触して、ここにマルクス派のインターナショナルを新マドリッド連合の名称で作し、エマシベーション(解放)誌を機関誌とした。けれどこれをスペイン連合は認知せず、ロンドンの総評議会がインターナショナル支部として認知するという変則的なものになったのである。

イタリアでは未だイタリア国家の統一前夜で、宗教的国民運動としてマツィーニ、ガルバルディの運動があった。しかしバクーニンが反マツィーニ論Vハインターナショナルはマツィーニに答えるVハ社会主義とマツィーニVハバクの仏語口授をイタリアの若い同志が伊訳したもの)等で激しく論難し、マツィーニの国家主義が民主主義の様相をとりながらも宗教的絶対権力の容認であり、イタリアの民族意識を高揚させながら神

権授受説的誤りに陥っているのを指摘したため、マツィーニの運動にあきたらず離れて行く若者達がA.I.T.に参加するようになった。1869年にはナポリ支部が設立され、71年に一度解体して名称をナポリ労働者連合として再建された。活動家はカメーロ・パラディノで彼の友人として若い日のマラテスターが出現した。当時の雰囲気(マラテスター)は次のように回想している。「私が社会主義者の運動に入った頃、イタリアに於けるインターナショナルの道筋であつた男(ガルバルディの事)訳註)に出逢った。もう少しはつきり言えば、その名は恐ろしい程の栄光に包まれ、彼の絶大な人気と不屈の性格は抗がい難い輝きがあった。彼の対立者の誰よりも偉大で、彼の態度が無意識のうちに人を引きつけること、彼への支持が離れようと間違つていようと、私はガルバルディを取除かない限り、イタリアの社会主義は空虚な言葉だけの人間主義、本当の社会主義の欺瞞でしかない」と確信した。」

彼の運動に対する激しい情熱は既にこの頃からのものだった。

他にもカルロ・カフエイロ、アルバート・テウチ、ド・モンテール等1871年12月ボローニアにイル・ファシオ・オペライオ(労働の統一)という団体を創設し

それがイタリア全土に拡がった。アンドレア・コスタが参加。最初ファシオ・オペライオはジュラ同盟と総評議会のどちらと接触してよいか判らず両方に関係していたが、総評議会の強権主義に反感、スペイン、ベルギー、スラブと同調、ハーグ大会には代表を送らなかったのはこのグループであった。

☆バクーニン追放劇

ハーグ大会(1872年9月2日)はマルクスによればハ今度はインターナショナルにとって生死の問題になるVという事だった。事実歴史年表では第一インターナショナルの解散は1876年であるが、バクーニンを追放することで、フランス、イタリア、スペイン、スイス、ベルギー各支部の反感と反感を買い、更に総評議会と英国労働組合連合との確執、ブランキストによる総評議会乗取りの恐れから、これをニューヨークに移したことでヨーロッパに於けるインターナショナルの実質的な終えんをもたらしたのである。むしろ会議進行と手続きに就てマルクスの戦術に手ぬかりはなかった。代表の構成をみて、65名中総評議会から21名出て居り、また多数派(マルクス派)の構成では40名を占めた。これに対し少数派バクーニン派は24名である。採決では初めから勝負

はきまつたようなものだ。その上総評議会のニューヨーク移転の腹つもりから米国代表3名が出席している。マルクス派2名、バクーニン派1名で、先にあげたマルクスのハインターナショナル生死の問題Vの手紙の宛先は米人ゾルゲで、この会議に出席し、米国での総評議会の責任者に選ばれる過程をみると、全くマルクス、エンゲルスの会議運営は予定通りに運ばれたとしか言いようがない。会議の詳細は資料1で見て戴くとして、欠席査問会で一方的に処断されたバクーニンの言い分を聞いてみよう。彼は1872年10月5日付でラ・リベルテ誌編集局宛てに手紙を書きハマルキストのハーグ会議で破門の裁決が私に対して発せられ、出版されたのだから公平の意味合から私の答弁も出版して欲しい。それは次のようなものである。Vと断つて言葉を続ける。

「マルクス氏とその追隨者の勝利は確実だ。多数者のうちのある人びと(マルクス、エンゲルス、ヘス等を指す)訳註)が長い時間をかけて準備し、すぐれた能力と監督でもって組織したのでから、彼等の演説の中によく見かける道徳と真理と正義の原則(仮規則の項目をもじったバクーニンのイロニー——訳註)に多大の尊敬を払わず、行動においてはなおさら少かつたとしても、今度はマルキストが仮面をかなぐり捨てたのである。その遺り

方は権力愛好者の特長的な仕方であり、いつも大衆の主権の名において行いが、これこそ将来、大衆を管理する際に使う色々な嘘いつわりの一つの踏石の役割を果すもので、彼等はインターナショナルの民衆を大胆にも隷属させることにしたのだ。

：インターナショナルのすべての会員、個人、支部、連合を結びつける法は一つだ。そしてその法が真実な一つの基礎の上に成立っている。その範囲、結果、応用の全分野をみてみると、それは労働者の搾取者に対する経済闘争において、あらゆる職業とあらゆる国の労働者が国際的に連帯する、という事である。それは労働者階級の自発的活動と絶対的な自由連合を通して、強いものが力が自由だというのではなく、あらゆる言葉と国々の労働大衆による連帯の現実的組織であり、布告によって統一されたり、何かの政府の保護に依るのではなく、それがインターナショナルの現実的で生きいきとした統合を作るのである。

ブルジョワの搾取に反対するプロレタリアートの戦闘的連帯の組織が急速に拡がる中で、ブルジョワジーに対するプロレタリアートの政治闘争が必然的に起き、成長するのを疑う人があるだろうか？ マルクストとわれわれはこの点では一致する。しかしわれわれをマルキスト

た上から下への体制秩序の擁護者である。しかもそれをも普通選挙や大衆の主権の名においてやるのだ。そういうものによって彼等は人が付き従って来る指導者、選ばれた主人としての名誉と特権を確保するのである。マルキストが受入れる唯一の解放は、彼等のいわゆる人民国家(Volkstaat)から生まれるのだ。彼等は無条件に愛国主義であり、彼等のインターナショナルはよく汎ゲルマン主義の旗をかかげる。ビスマルクとマルクスの政策に特別な差異はないが、マルキストとわれわれの間には裂け目がある。彼等は政府を受入れるが、われわれはアナキストなのだ。

今日インターナショナルを両陣営に分裂させた2つの態度がある。一方は大体ドイツだけで、他方度合こそ差があるが、イタリア、スペイン、スイス、フランスの大部分、ベルギー、オランダ、それにスラブもだ。この両傾向がハーグ会議で衝突した。そしてマルクス氏の策謀と会議を構成した技巧的な組織のお蔭でドイツ側が勝利を納めた。

バクーニンはハーグ大会で成功する為に、マルクスがブランキストを引き込んだが、役割をさせると手を切つて、総評議会が彼等の手中に納まるのを恐れニューヨークへ船出させたと云う。事実インターナショナルがコ

から分ける問題もそこにあるのだ。

われわれはプロレタリアートの政策は当然革命的なもので、国家の破壊を直接また唯一のものとしなければならぬと考える。われわれには、国際的連帯について語りながら、しかも国家を温存するというのは理解できない。世界国家の夢の中では世界的隷属があるのであって、偉大な皇帝や法皇の夢ではそういうのも存在する。というのは国家はその本質からして、連帯の破壊者であり、しかも永遠に戦争の原因なのである。われわれはまた国家の中で、また国家によって、プロレタリアートの自由や大衆の真の解放ができるというののも理解できない。国家は支配を意味する、そしてすべて支配は大衆の従属を含むのだから、従って少数の支配者によって大衆が搾取されることになるのだ。

われわれは例え革命の過渡期であっても、選挙団体、臨時政府、いわゆる革命的独裁というのには受入れない。なぜなら革命は大衆の手中で始めて真剣で公正で現実的なものになるからで、またもしそれが少数の支配者に集中されると、当然またすぐ反動になると信じるからである。

マルキストは全く別な思想を公表している。彼等は国家権力の崇拜者で、当然政治的社会的規律の代弁者、ま

ミュンナウゼーブランキストの手に入るのを恐れ自殺を選んだとする文献もある。(インターナショナルと革命ニコミューンの亡命者著、ハーグ会議の問題、ロンドン1872年)次いで彼は総評議会が英国労働者連合の書記局を認知しなかった事をあげる。マルクスの考えでは書記局を認めると評議会と仕事がよく合う、ストのような事態がつづくといわれインターナショナルへ駆け込んで支援を求めらるうと言っている。しかしこのハーグ会議以降、協会の創設以来の協力者達エッカリウスその他はマルクスの独裁的やり方、労働力愛好、策謀の傾向を理由に彼から離れ、バクーニン派に同調するようになった。(1873年)バクーニンはそれも指摘している。

なお国家論に関連して彼は経済の要素以外の重要なものとして、各民族の反逆の本能について言及している。「マルクスは言う。すべての国の政治国家は、常に経済条件の所産であるがその忠実な反映である。だから前者(国家)を変えるには後者(経済)を変えるだけでよい。これがマルクス氏によれば政治的進歩の秘密である。彼は経済条件に及ぼす政治的、法律的、宗教的、制度的には一顧も与えない。彼は(経済的)貧困が政治的隷属、国家を生むと言っている。この反対は許さないのだ。即ち政治的隷属

1 国家が貧困を国家存立の一条件として再生産し、維持する。そこで貧困を破壊するには、国家を破壊しなければならぬ。と考えるのである。

マルクス氏は人類の歴史的發展において、一つの非常に重要な要素を見落している。それはすべての種族と民衆の個別的気質と性格である。それらは人種学的、風土的、経済的また歴史的要素が集って生みだすが、一度確定すると各種族の運命に相当影響し、一国の経済力の發展でさえ、経済条件の内外で左右する程である。これらの要素の中で、またいわゆる自然的特長の中で、その効果が各民族の個別史に決定的に働くものがある。それが反逆の本能の強度で、それによって自由が連れ添い、またそれを確保するのである。この本能は全く原初的で動物的要因である。それはすべての生物において程度の差があり、各生物の活力や精力はその強度によって計られる。人間に於ては強制的な経済的^{必要}と組合わさって、それが人類解放のすべての動因のうちで最強なものとなるのだ。それは気質の問題で知性や道徳文化の問題ではないから一とはいえず常にその両方に訴えはするが、よくあるのは文明化した民衆は僅かしか持っていないことだ。多分その民衆は彼等の初期の發展段階で使い果してしまつたが、彼等の文明の質そのものが、それを吸いあげて

しまつたのだらう。或はまた歴史の夜明けから彼等は他の民衆に比べその分け前（反逆の本能の事1訳註）にあづかるのが少かつたからかも知れない。」

彼の書き物では時々本題からそれる議題にお目にかかる。ハーグ會議の結論から反逆の本能を説くのはそれこそマルクスのハ事案の論理Vとはかけ離れるが、それがバクーニンの特色であり、計測不可能な人間の行動を説明する有力な手がかりではある。

インターナショナルは死んだ。マルクス派のインターナショナルは米國で余命を保ち、ジュラ同盟を中心としたアナキストインターナショナルは次の世代、マラテスター、クロボトキン、エリーゼルクリュに手渡されるのだ。バクーニンは1873年の夏イタリアで蜂起の準備をし、1874年同じくイタリアのポローニアでの活動を最後にスイスに隠退した。最晩年は哲學的問題に没頭したと言う。生涯に亘ってハブルードンのように正義を求め、バブーフのように反逆において死ぬVのを願つたバクーニンは1871年7月1日スイスの首都ベルンで死んだ。彼の故國ロシアでは既にフ・ナロードの運動が始まっていたのである。